

落合芳幾研究

— 「東京日日新聞」錦絵を中心に —

A Study of Ochiai Yoshiiku

— *Mainly Shimbun Nishiki-e of "Tokyo-Nichinichi-Shimbun"* —

菅原 真弓 *Mayumi Sugawara*

(美術学部)

1. はじめに
2. 落合芳幾の画業
3. 「東京日日新聞」錦絵について
4. おわりに：落合芳幾と錦絵新聞、新聞人としての芳幾

1. はじめに

落合芳幾（おちあい・よしいく：天保4年～明治37年/1833-1904）は、明治期に活躍した浮世絵師である。幕末期の浮世絵師歌川国芳（1797-1861）門下の俊秀として、同門の月岡芳年（1839-92）と並び称された存在であった。その芳年との共作である「英名二十八衆句」（慶応2、3年/1866, 67）は彼の代表作の一つであり、これが幕末から明治初年の浮世絵を語る時、必ずと言っていいほど取り上げられる「血みどろ絵」というジャンルの代表的な作例であることはよく知られている。

また維新後の芳幾は、東京初の日刊紙『東京日日新聞』の創刊（明治5年/1872）に参加するなど新聞人として活躍し、明治という新時代における浮世絵師の活路を拓いた存在と言える。さらに、新聞記事の内容を錦絵化して出版した新聞錦絵（あるいは錦絵新聞とも）¹⁾という媒体を創始し、彼が描いた「東京日日新聞大錦」（明治7、8年）は大いに人気を博した。加えて新聞挿絵という新しい分野を切り拓いたのもまた、この芳幾の功績と言ってよい。

しかしこの絵師に関しては、同時代を活躍期とした、例えば豊原国周（1835-1900）などと同様、研究蓄積が極めて薄い現状である²⁾。拙稿「浮世絵師・落合芳幾の基礎的研究」（2016）³⁾では、現在までに確認できたすべての資料を網羅した文献目録を作成しているが、芳幾に関する文献数は60件。豊原国周の53件には勝るものの僅差である（2014年度時点）。また月岡芳年や小林清親といったやはり同時代の絵師への関心と比べると、非常に残念な結果となっている。そして残念ながらこれまで個展も開催されておらず、画集も存在しない。

ところで本稿筆者はこれまで、先に挙げた月岡芳年や豊原国周、あるいはやはり同時期を活躍期とする小林清親（1847-1915）について検討を行い、明治浮世絵の全貌を明らか

にしようとして試みてきた⁴⁾。落合芳幾研究もまた、その試みの一つである。本稿では、前掲拙稿で提示した基礎資料とこれを基に作成した年譜を基に芳幾の画業を総観し、かつ代表作と目される「東京日日新聞」錦絵について、些か私見を述べたいと思う。

2. 落合芳幾の画業

(1) 出自と環境：絵師「芳幾」となるまで

芳幾との親しい交友が伝えられる戯作者仮名垣魯文(1829-94)と山々亭有人(條野採菊、1832-1902)が共同で編集し、挿絵を芳幾が担当した『粹興奇人傳』(文久元年/1861)は、彼らが組織していた「粹興連」のメンバーを紹介するテキストと肖像画が掲載されている。その中に芳幾自身の紹介(図1)もあるのだが、これがこの絵師についての最初の伝記記述となる。少々長くなるが引用する。

芳幾は幼名幾次郎、父は日ほん堤に引手茶屋を渡世となせしが、せめて一子のかたぎの商人になさんとて、質店に奉公させしかど、画師にならん事を欲して主家を欠いたしぬ、されどもちちはこれを承引(うけひか)ず、又も奉公させしかど、是もはじめのごとくなれば、いまはのぞみにまかせんとて、終に国よしが門に入りぬ、この仁(ひと)温和にして人とさからふことをせず、しかも孝心あつくして、よく両親につかへ、彼(かの)茶屋渡世をやめ、筆一ぼんにて両親(ふたおや)をやしなふ、その孝道諸神もかんのふましましけん、其わざひひいで、芳名四方(よも)にたかく、当時倭画師(やまとえし)の売出しにこそ

(読点及び()のルビは適宜引用者が付した)



図1 『粹興奇人傳』より「一庵斎芳幾」

生家の家業や本名(幼名)、そして絵師芳幾になるまでの経緯を含め、数え齢29歳時点での芳幾の人生が語られている。本名(幼名)が「幾次郎」であったこと、吉原遊廓近くの日本堤にあった引手茶屋⁵⁾の息として生まれたことが記されている。また、当初は質屋に奉公に出されたが、本人が絵師になりたい気持ちが強かったために、ついに許されて浮世絵師になったこと、師は歌川国芳であること、がわかる。また親孝行の良い息子であることも伝えてくれている。しかし一方末尾の記述からは、芳幾がまだ人気絵師にはなっておらず「売り出し」中の存在であることがわかる。

本資料では「質店に奉公させしかど、画師にな

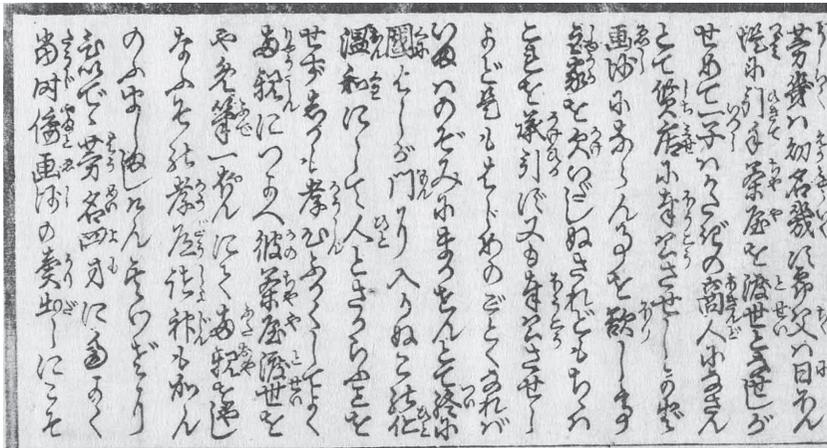


図1 部分

らん事を欲して主家を欠いだしぬ」と、絵師への夢が絶ち難かったとのみあるが、これとは別の資料である「落合芳幾《明治の浮世絵》」⁶⁾は、このあたりの事情を少し詳しく伝えてくれている。幼少期を、国芳門下の一好斎芳兼の息武内久一（木彫作家）と遊んで過ごし、芳兼の仕事を見ていたことが、絵師への夢をふくらませたきっかけであったというのである。さらに17、18歳のころ、この芳兼の紹介によって国芳に入門したとも記している⁷⁾。17歳であるとするれば嘉永2年（1849）のことになるが、これは浮世絵師への入門時期としては遅いほうであると考えられる⁸⁾。画名は国芳の「芳」と本名の「幾」次郎から採って「芳幾」、号は一蕙斎（後に蕙斎）、朝霞楼、蕙阿弥。他の号として晒落斎などがあるという⁹⁾。

浮世絵師としてのデビューは、嘉永7年（1854、11月27日に「安政」と改元）の合巻『箱根靈驗覽仇討』はこねいげんいざりのあだうち（柳水亭種清作）の挿絵とされている¹⁰⁾。

(2) 浮世絵師一蕙斎芳幾誕生とその交友関係

デビューの翌年にあたる安政2年（1855）10月2日（太陽暦換算では11月11日）、安政江戸地震が発生する。この事件に取材した作品を描いたことが、芳幾画業の画期となった。前項に挙げた「落合芳幾《明治の浮世絵》」¹¹⁾は、安政地震の際、命の危険をも顧みず、吉原遊廓の惨状を三枚続にして描き出し、これを版行したところ一か月で「二十杯（＝四千組）の売高」に及び、「芳幾の画名は忽に伝播」したとする逸話を記している。続々と注文が殺到し、こうした作品だけでも7～8種類ほど描いたという。一方、この地震で「臨月の妻は嫖客を吉原の稲本楼に送り行き、入口の梁に打れて横死を遂ぐ」とあり、また自家も潰れてしまった不幸をも併せて記す。無款「安政二稔十月二日夜亥朱刻大地震焼失市中騒動図」（図2、東京大学地震研究所蔵/石本コレクション）¹²⁾は推定筆者として芳幾を挙げており、資料にある芳幾による安政大地震取材の作品はこうしたもので

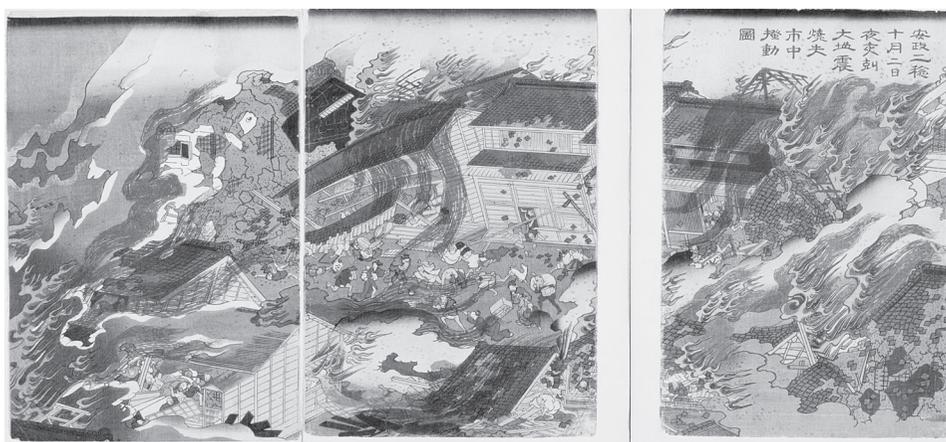


図2 無款（落合芳幾か）「安政二稔十月二日夜亥朱刻大地震焼失市中騒動図」 大判錦絵三枚続

あったかと思される。

また安政4年に挿絵を担当した『操松月景清^{みさおのまつつきのかけきよ}』初～3編（鈍亭魯文作）も芳幾の画期となった仕事であろう。後に親しい交流を持つ戯作者仮名垣魯文（1829-94）との出会いとなった作品だからである。魯文の弟子であった野崎左文が著したその伝記『仮名反故』¹³⁾（明治28年/1895）は、この合巻が魯文にとっても画期となったものであることを以下のように記す。

安政四年の春魯文は「操松月景清（みさをのまつつきのかけきよ）」といふ三冊物の草双紙を著し口絵さし絵とも一恵斎芳幾筆にて呉服町の書肆榎屋茂吉方より出版す、魯文はまで著はせし戯作多かりしも皆切附本と称する印刷紙質とも粗悪なる冊子のみなりしに此書は彫刻精巧、製本も亦美を尽したれば世評随つて宜しきのみならず魯文も亦初めて檜舞台に上りたる心地なりと言ひて喜びしとなん、

(())内は原文のルビ)

こうした実績によって芳幾は、安政6年頃の番付「花王競十種咲分」に「真写 一恵斎芳幾」とその名が載るところとなった¹⁴⁾。さらに翌安政7年（万延元年）閏3月21日には、柳橋河半楼で画名の披露を行ったとされ¹⁵⁾、言わば新進気鋭の若手絵師として一躍表舞台に上ったということになる。この翌年にあたる文久元年（1861）3月、師の国芳が没する¹⁶⁾が、芳幾は国芳門下を代表して師の死絵（図3）（肖像画）を制作している。

そしてちょうどこの頃より、先に挙げた仮名垣魯文や山々亭有人（條野採菊）らとの親しい交遊が始まっている。本項冒頭に挙げた『粹興奇人傳』（図4）（文久元年/1861）を企画したのが魯文らであること、この書が彼らに加えて芳幾も参加していた「粹興連」のメンバー紹介とその肖像が記されていること、さらに肖像を担当したのが芳幾であるこ

言作者、そして噺家たちと共に「三題噺」の集まりを持ち、「粹興連」を組織していたことがわかる。先にも挙げた魯文や有人に加え、狂言作者河竹黙阿弥（1816-93）、瀬川如阜（三代目：1806-81）や戯作者武田交来（1819-82）の名が見える。「噺」の「黒人（＝玄人）」として挙げられているのは三遊亭円朝（1839-1900）ら。浮世絵師は芳幾の名しか見当たらず、絵師の立場でありながら、彼ら幕末市井の文化人たちの仲間入りを、既にこの時期にはしていたことが窺える。特に魯文や有人、武田交来といった戯作者たちと、作家と挿絵画家という関係以上の親密な交わりを持ったことが、その後の芳幾の人生を方向づけたとってよい。

彼らの興じた遊びとしてはもう一つ、「興画合」があった¹⁸⁾。「興画合」とは「時々決められた「兼題（題目）」を文学や歌舞伎を背景とする見立て、言葉遊びなどを通して異なるイメージに読み変え、これを画に描き出せばえを競う遊び¹⁹⁾」のことである。この「興画合」の中心人物であった波月亭花雪の三回忌の追善として出された『久万那幾影』（慶應3年/1867）は、この遊びに参加していた社中（興画会、興画連とも）の人物の影像と人物紹介のテキストが記されたものだが、芳幾はこれも挿画を担当している²⁰⁾。また自身の影像（図5）およびテキストも掲載され、そこには「当時浮世絵三傑と称せらるゝ」との評価が見られる。



図5 『久万那幾影』

ここまで見てきたように、文久から慶應年間（1861～68）は、この時期に得た交友関係によってその後の方向性を定めていく時期でもあり、また最もその評価が高い時期でもある。文久元年の番付では東の大関に擬せられたことが以下の資料より明らかになる。

芳幾の全盛期は文久慶應の年間にあり、文久元年出版の『浮世絵番附』²¹⁾にも亀戸豊国を勧進元とし、梅蝶楼国貞を行司となし、芳幾を東の大関に据え、西の大関は国周を置きしを見ても、其の当否は暫く措き兎に角人気のありし事は想像し得る。

靄軒生「落合芳幾《明治の錦絵》」²²⁾

またこれに続く慶應元年（1865）の番付『歳盛記』（図6）では、芳虎や芳艶といった国芳門下の兄弟子に続き第七位に、明治元年（1868）の番付（図7）では第三位に位置することとなった。絵師としての評価は定まっていたと言ってよい。

全盛期とされるこの時期の芳幾の作品として特徴的なのは、影絵という手法を用いた作品である。先に挙げた『久万那幾影』刊行と同時期に、やはり影絵による役者絵シリーズ

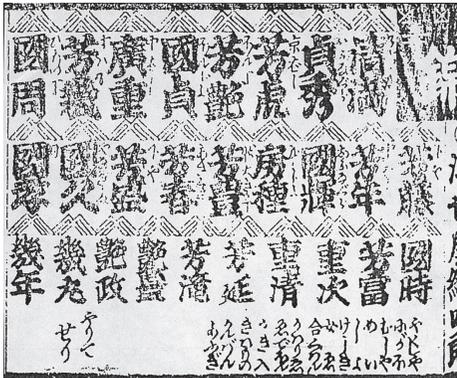


図6 『歳盛記』慶応元年

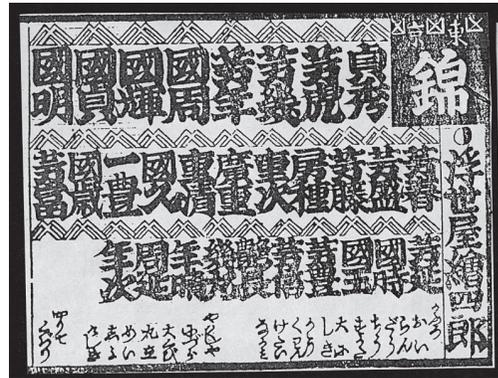


図7 『歳盛記』明治元年

「真写月花之姿絵」^{まことのつきはなのすがたえ} 38枚を刊行しており、現在に至るもこれらの影絵作品は彼の代表作の一つとされている²³⁾。また、冒頭にも記した芳年との共作シリーズ「英名二十八衆句」を慶應2年から刊行し、同年にはパリ万国博覧会に出品する肉筆浮世絵画帖制作にも参加している。これは橋本貞秀、新井芳宗を総代とし、二代国貞、国周、二代国輝、芳艶、芳年との分担によるものであった²⁴⁾。さらに明治と改元する慶應4年には「時世粧年中行事之内」(三枚続)、「春色三十六会席」(37枚、～翌明治2年4月)などの錦絵シリーズを刊行。前年秋の大政奉還から続く激動の世にあっても、芳幾の作画意欲は減じておらず、精力的な仕事ぶりを見せている。しかし錦絵作品としては、明治3年(1870)に刊行された「俳優写真鏡」(図8)のシリーズを最後に、ほとんどまとまった作品を残していない。十数図が確認されるというこのシリーズは、流行し始めていた写真の表現を錦絵で表わそうとしたものとされ、表面は写真の質感を表現すべく「蠟引き」になっているという²⁵⁾。極力輪郭線を用いず、立体感を陰影で表現しようとした意欲的な作品ではあるが、その人気は芳しくなかったと伝える²⁶⁾。

作家淡島寒月の「私の幼かりし頃」²⁷⁾は、明治の浮世絵界における芳幾の評価を、他の絵師と比較して記している。

(略) 欧化主義の最初の企ての如く、清親の水彩画のような風景画が両国の大黒屋から出板されて、頗る売れたものである。役者絵は国周で独占され、芳年は美人と血糊のついたような絵で持て、また芳幾は錦絵としては出さずに、『安愚楽鍋』『西洋道中



図8 落合芳幾「俳優写真鏡 中村芝翫」

膝栗毛』なぞの挿絵で評判だった。(略)

ここで注目すべきは、他の絵師については錦絵の作例を例示するのに対し、芳幾については「錦絵としては出さずに」とあり、芳幾が錦絵制作から距離を置いている印象を持っていることだ。ちなみに『安愚楽鍋』は明治4年(1871)から、『西洋道中膝栗毛』は明治3年から刊行された開化風俗を描き出した合巻で、いずれも仮名垣魯文の作である。

(3) 新聞人・落合芳幾の仕事

明治5年(1872)2月21日(太陽暦では3月29日)、芳幾は東京では初めての日刊新聞『東京日日新聞』の創刊に参加する。戯作者山々亭有人(條野採菊、伝平)と貸本屋辻伝右衛門の番頭であった西田伝助(1838-1910)、そして芳幾(落合幾次郎)が創刊メンバーで、程なくしてやはり辻方に勤務していた広岡幸助(1829-1918)が加わることになる。

草創期の新聞には、たとえば記事の内容を補足補完するようなビジュアルイメージは付されておらず、芳幾がこの新聞の創刊に携わったのが絵師としてではないことは明らかである。前項に記した幕末の文人たちとの交友関係、たとえば粹興連であるとか興画連といった会での交流が彼をしてこの事業に主体的に参加せしめたものだろう²⁸⁾。新聞という存在自体が新しく、清新なイメージのあるメディアだった。浮世絵版画もまた大量複製大量頒布が可能なメディアの一つと言うことができ、特に幕末以降の浮世絵版画が次々に起こる諸事件をまがりなりにも描く報道媒体の側面を強く持ったことを考えれば、芳幾にとって、この新しいメディアへの参加はハードルが高いものではなかっただろう。但し、芳幾と同時代を生きた浮世絵師たちにとって、その後導入されていく新聞の挿絵に筆を執ることは多くあり、それが彼らの活路となっていくが、芳幾のように新聞というメディアの創刊に新聞人として携わった人物はいない。

さらに芳幾は、当時の新聞には欠けていた記事内容のビジュアル化を行っている。それが冒頭にも少し触れ、かつ本稿の主たるテーマである「錦絵新聞(新聞錦絵)」²⁹⁾である。新聞記事の内容を、記事原文のままではなく幕末以来の戯作者たちが新たに書き起こし、これを錦絵化した新たな媒体であり、『東京日日新聞』創刊の2年後、明治7年(1874)から翌年にかけて刊行したものである。この錦絵新聞「東京日日新聞大錦」については次章で述べることにする。

『東京日日新聞』創刊以降の芳幾は、新聞人として、あるいはもっと広く出版人としての仕事へと舵を切っていく。特に大きな仕事としては明治8年4月、『東京日日新聞』の記者であった高島藍泉(1838-85)と共に『平仮名絵入新聞』(同年9月より『東京平仮名絵入新聞』、翌明治9年3月より『東京絵入新聞』と改称)を創刊した事が挙げられるだろう。同紙には芳幾自らの筆で挿絵が描かれていたが、これが新聞に挿絵を入れた最初の事例となったからである³⁰⁾。また新聞だけでなく雑誌の創刊にも携わっており、明治12

年に創刊した演劇雑誌『歌舞伎新報』は、代表的な仕事と言えるだろう。ここで芳幾は自ら筆を執り、俳優の似顔絵を描いている³¹⁾。通号1669号を数え、明治30年(1897)3月まで18年の長きに渡って続いたこの雑誌は、俳優の消息や各座の上演演目情報およびその筋書き、そして歌舞伎の台本を初めて活字化して脚本として掲載した雑誌であった³²⁾。

(4) その晩年

芳幾の晩年については寂しい記録が残っている。雑誌『此花』に掲載された「一蕙齋芳幾の末路」³³⁾がそれだ。芳幾が亡くなって7年という段階で、交友があった清水晴風からの聞き書きという形でまとめられた文章で、「芳幾の晩年ですか、イヤ悲惨(みじめ)なもので御坐いました」と始まる。明治23年(1890)の『東京絵入新聞』終刊後はまず、葺屋町にあるレンガ造り三階建ての立派な家を借りて、妻、息子、娘夫婦と共に住んでいたというが、様々な事業に失敗して大きな借金を抱え、終には一家離散の憂き目にあったと伝える。そんな芳幾の窮状を救おうと、親しい友人たちが企画したのが師国芳の四十回忌および追善書画会の開催だったが、かえってそれが裏目に出、困窮のうちに没したという³⁴⁾。

3. 「東京日日新聞」錦絵について

(1) 『東京日日新聞』の創刊と芳幾

前章でも触れているように、芳幾が参加した『東京日日新聞』は東京初の日刊新聞であった。創刊にあたった人物の一人、西田董坡(伝助)は後に明治37年(1904)の同紙紙面で、当時の様子を語っている³⁵⁾。少々長くなるが引用する。

私は辻さん(引用者註・貸本屋辻伝右衛門)の本屋の店におりましたとき、有人(引用者註・條野採菊、伝平)、芳幾の両人がやってきました(中略)そのときいろいろ話のすえ条野がいうには(中略)いろいろの話からフランスでは新聞を売るのに浮床というものがあって、それで爺さんとか婆さんとかが売っている。日本でもあれをやったら売れるだろうと話された(引用者註・條野採菊が話をした杉浦讓氏の言葉)というのが、そもそも日日新聞の始めなんです。そこで三人でひとつそれをやってみようじゃないか、きっと当たるだろうから、それじゃ寄って相談しようというので、ある一日条野のところへ寄りましていろいろ相談をした。そのときのめいめいの考えでは、条野は戯作をしていながら、落合は画を描きながら、私は辻の店に勤めながら、みな片仕事にして、ものの千枚ずつも売れたら暮しの助けにもなるだろうくらいのつもりであった。

この記述から分かることは、この草創期の新聞が、いわゆる仲間うちの仲良しどうして語り合って創刊されたことだ。そしてその仲間に芳幾が含まれているのは注目すべき事実と

言ってよい。先にも記した通り、芳幾が絵師としてではなく、幕末以来の親しい交流の中で生まれた人間関係によって新聞人として共に一步を踏み出したということだからである。

さてこうして創刊された『東京日日新聞』の第一号(明治5年2月21日号)³⁶⁾(図9)を見てみると、挿図が一つあるもののモノクロで、その他はすべてテキストであることがわかる。ちなみにこの創刊号は一面のみで、木版刷りであった³⁷⁾。現代の新聞紙面に慣れた私たちの眼から見れば、きわめて素朴なものだ。裏表の二面となるのは翌明治6年2月2日からである³⁸⁾。また創刊号から一か月ほどは木版二色刷りとし、「題号や広告料などの部分は墨刷りの本文と色を変え、美しく装飾した題号をしばらく用いていた」³⁹⁾とある。創刊号の題号の文字(図9)を見ると装飾的な文字であることが分かる。

紙面は「官書公報」と「江湖叢談」の二欄で構成されており、前者は「政府の布告や公文書などを収録するところ」、一方後者は「ニュースを収容するところ」であった⁴⁰⁾。創刊号の「江湖叢談」には、三つの記事が記されている。最初の記事が信州今井村の殺人事件、次に遣米使節一行がソルトレイクシティ(記事中では「塩湖」と表記)から伝えたたよりを、そして最後に神田に開店した酒屋の酔っ払いについての記事だ。記事とする内容の取舍選択や掲載順もまた素朴なものと言えようが、第一号に海外関連のニュースを載せた事、またやはり第一号に掲載された事件記事の後ろに「記者の評語」を掲載した事は、その後の同紙の方向性を象徴するものだといわれる⁴¹⁾。

しかしここで注目したいのは、第一号の

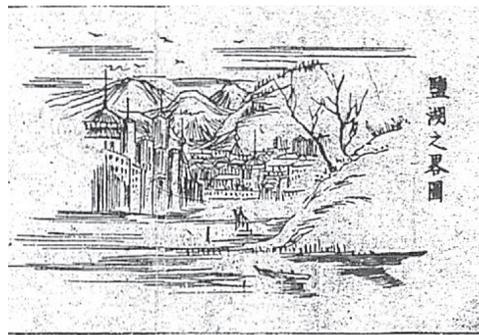


図9部分 『東京日日新聞』第一号

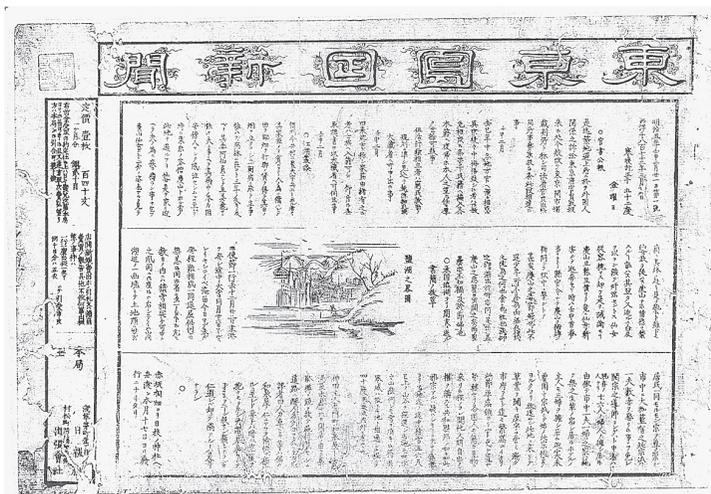


図9 『東京日日新聞』第一号

時点で既にモノクロの簡易なものとは言え、挿図（図9部分）が付されていることだ。二つめに掲載された遣米使節のソルトレイクシティ滞在に関連して「塩湖之畧図」と題した挿図が見て取れる。管見の限りでは明治5年4月13日（太陽暦では1872年5月19日）付同紙第四十八号までは、こうした簡素な挿図が見られる。記事内容を補足したり、あるいはよりリアルに伝えるためにビジュアルイメージが大切であることは、現代の新聞紙面を見ても明らかだが、同紙が創刊時から小さなものとはいえ、挿図を付していたことは、創刊にあたった人物たちの出自に起因するものと考えられる。

(2) 「新聞（記事）」＋「錦絵」＝新聞錦絵（錦絵新聞）

明治7年（1874）8月、『東京日日新聞』に掲載された記事（うち「江湖叢談」）を引用元とする錦絵が初めて刊行された。錦絵版「東京日日新聞」（あるいは「東京日日新聞」錦絵）（図10）である。そして先にも触れているように、これに筆を執ったのが芳幾だった。但し紙名を謳ってはいるものの、出版元は浮世絵版画の版元である具足屋である。

新聞錦絵とは、新聞本紙に掲載された記事の中から殺人事件や珍談奇談の類を錦絵化した新たな媒体であり、翌8年からは『郵便報知新聞』の錦絵版を含め多くの追随版を出した。この新媒体は大ブームとなり、この流行は大阪にも波及するほどであった。東京では「東京日日新聞」「郵便報知新聞」に加え、引用元を一新聞に限定しない「各種新聞図解」が刊行され、総計で200点を超えるという。また大阪においては東京刊行よりも盛んに約500点以上が刊行されたという⁴²⁾。しかしそのブームは一時的なもので、明治9年には大火となり、同10年代にはほとんど見られなくなったという⁴³⁾。

先行研究⁴⁴⁾を基に、この媒体の刊行状況等について記す。「東京日日新聞」錦絵は、総数にして114点を数える。刊行期間は明治7年8月から明治9年12月までの約2年半だが、明治9年11月以降の作品3点は芳幾が描いたものではなく、芳幾画作品としては111点ということになる。最も多く刊行された最盛期は明治7年10月の19図であるが、翌8年5月以降は8月に8図が刊行される以外は出版が見られず、翌9年からは芳幾以外の絵師⁴⁵⁾がこの作画を担当している。ここから芳幾がこの媒体から離れたのは明治8年中のことと考えられる。

さてしかし、では錦絵新聞という媒体はなぜ生まれてきたのであろうか。その経緯について



図10 「東京日日新聞」錦絵

は、『東京日日新聞』の歴史を記す資料の中には見いだせない⁴⁶⁾。またこの媒体に関する先行研究においても「なぜ」誕生したのか、については記されていない。唯一、岩切信一郎「錦絵新聞——浮世絵がニューメディアになった!？」⁴⁷⁾の中に、一つの回答が示されているので、以下、少々長くなるが引用する。

(略) 文明開化の時代がやって来て、新聞の語が聞こえ始める頃には、よく世故に通じて新奇なことに最も敏感である浮世絵界のことであるから、錦絵を新聞にする発想は当然の成り行きであったと見る方がよさそうだ。新聞のイメージをおぼろげに人々が描き始めたところを見計らって出版に踏み切った、そう思えば良い。

当時の錦絵出版の過程から言えば、版元具足屋の判断だったと考えられるが、最初の錦絵新聞のひとつ『東京日々新聞』の創刊メンバーであり、新聞発行に名を連ねる人であり、版下を描いていたのが落合芳幾であることを思うと、当然ながらこの出版には芳幾が一枚かんでいるだろうし、少なくとも相談あつてのことであつたであろう。

では改めて「東京日日新聞」錦絵(図10)を確認してみよう。画面上部に幅広のリボンのような形状のものが配置され、ここにタイトル「東京日々新聞」が記され、左端に該当する新聞本紙の号数が記される。タイトルを両端から支えているのは天使たち。それまでの日本にはないイメージであり、言わば開化の象徴だった。たとえば長野県松本市に今も残る旧開智学校の玄関ポーチに天使たちがあしらわれていることからそれが窺え、こうした事例が本作品の画面に影響を与えたであろうことはしばしば指摘されることである⁴⁸⁾。

華やかな赤い枠で囲まれた画面にはしかし、たとえば本図のような陰惨な殺人事件の現場などが描かれている。

(3) 新聞記事と錦絵の積文、そしてビジュアル化

「東京日々新聞 第一号」(図10)はタイトルが示す通り、『東京日日新聞』第一号(明治5年2月21日)(図9)に掲載される記事に取材して描かれた作品である。錦絵版の積文を記したのは画面右下にも示されるように山々亭有人(條野探菊、伝平)である。「東京日日新聞」の錦絵版に積文を記しているのは、「東京日日地新聞大錦(開版予告)」(図11)に記された山々亭有人、点化老人、温克堂龍吟、百九里散人、巴山人、轉々堂主人(高島藍泉)の6名だが、有人は同時に本紙である『東京日日新聞』のスタッフでもあつ



図11 『東京日日新聞』大錦(開版予告) 明治7年

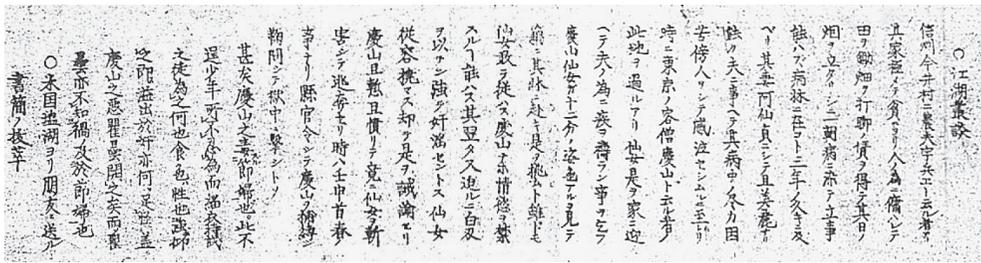


図9部分2 『東京日日新聞』第一号 テキスト

た。また高島藍泉は、先にも記した通り、後に芳幾と共に『平仮名絵入新聞』を立ち上げた同志だった。

ここで描かれているのは、先にも紹介した信州今井村の殺人事件である。まず本紙の記事(図9部分2)を書き起こして以下に記す。

信州今井村ニ農夫宇兵エと云ル者アリ其家極メテ貧ニヨリ人ノ為ニ備ハレテ田ヲ鋤畑ヲ打聊ノ賃ヲ得テ其日ノ炬ヲ立タリシテ一朝病ニ染テ立事能ハズ病牀ニ在コト三年ノ久キニ及ベリ其妻阿仙貞ニシテ且美麗ナリ能ク夫ニ事ヘテ其病中ノ尽力困苦傍人ヲシテ感泣セシムルニ至レリ時ニ東京ノ客僧慶山ト云ル者ノ此地ヲ過ルアリ仙女ニヲ家ニ迎ヘテ夫ノ為ニ疾ヲ■ラン事ヲ乞フ慶山仙女ガ十二分ノ姿色アルヲ見テ■ニ其牀ニ赴キ是ヲ挑ムト雖ドモ仙女敢テ従ハス慶山ナホ情欲ヲ禁スルヲ能ハス其翌夕又迫ルニ白刃ヲ以テシ強テ奸淫セントス仙女従容撓マス却テ是ヲ誠諭セリ慶山且慙且憤リテ竟ニ仙女ヲ斬害シテ逃奔セリ時ハ壬申春ノ事ナリ県官令シテ慶山ヲ捕縛シ鞫問シテ獄中ニ撃シトソ

一方、錦絵版「東京日々新聞」(図10)の釈文を記す。

長野/県下/信濃国更級郡今井村に貞婦あり名をせんと云/夫宇兵衛一朝病の床/に臥遂に身/体不随/となりしを/せんハ女の身/一個に昼ハ雇/ハれ聊の/賃を/請得糊口を計り/夜ハ看病に眠もやらず然るに或日夕まぐれ道に迷ふて宿乞僧あり/せんハ宿世の悪かりて斯も不幸のつづけるならん良夫の為に読経を頼まん/ものと伴ひ入れしが此僧無頼の悪僧にてせんが容儀の艶なるに忽ち/起る凡悩心道ならざりし引導貞婦ハ更に肯はず刃物を以て迫りしかど身ハ是刀下の鬼となる共争不貞の名をとらんと/意倍々金鉄の錆なきものをむざんにも刃の錆と成ケるを/朝廷これを賞せられ祭楽の料を若干賜ひ門閭に/掲げ悪僧ハ輦下に引れ罪に処し正邪忽ち/判然たり

「山々亭/有人誌」(朱文方印)

(/は作品中での改行を示す)



図13 柳亭種彦『修紫田舎源氏』第十一編

「東京日々新聞 第一号」(図10)と、月岡芳年が描いた「郵便報知新聞 第四百四十九号」(図12)とを比較してみると、前者が絵の余白をいっぱい用いてテキストを記しているのに対し、後者は画面上部に枠を作ってテキストを配置していることがわかる。画に用いることができる面積を考えれば前者は広く用いることができ、ダイナミックな画面を構成することができるのである⁵¹⁾。

ちなみに、画面にテキストが混在している媒体としては江戸期の戯作本、合巻の存在が挙げられる。たとえば柳亭種彦の代表作『修紫田舎源氏』⁵²⁾十一編(図13)を挙げる。見開き画面いっぱいに隙間なくテキストが記され、もはや背景をも文字が埋め尽くしている。その若年期に多くの合巻挿絵を描いてきた芳幾ならでの、そしてそれら著作をものしてきた山々亭有人ら戯作者たちならでの画面構成と言えるだろう。

4. おわりに：落合芳幾と出版界、芳幾研究の展望

本稿では、明治を代表する浮世絵師の一人と称されながら、現在では忘れ去られた存在になりつつある絵師・落合芳幾の画業を、資料と作品に基づいて出来るだけ緻密にトレースし、さらに彼の代表作の一つと目される「東京日日新聞」錦絵について若干の検討を加えた。

芳幾と同時代を生き、たとえば月岡芳年や豊原国周といった浮世絵師たちについても研究が進んでいるとは言えない状況ではあるが、特に芳幾に関する研究蓄積が薄いのは、彼が浮世絵師としての活動よりもむしろ、新聞人としてあるいはもっと広く出版界へとその活躍の場を求めて生きたからかと思われる。ちなみに芳幾および同時代絵師たちの弟子が直面したのは、浮世絵という媒体の終焉であった。彼らの弟子たちは、たとえば日本画

家に、そして多くは新聞などの挿絵画家として活路を拓いていく。その意味で芳幾は、やがて終焉を迎えることになる浮世絵界を見据え、後進たちに道を提示した存在であったと積極的に評価すべきであろう。

また本稿では触れられなかったが、新聞という媒体に初めて本格的な挿絵を描いた挿絵画家としての芳幾についても、たとえば彼が創刊した『平仮名絵入新聞』の挿絵を具に検討することによって評価を定めていく必要がある。さらにはもっと広く、出版界と明治後の浮世絵師たちとの関係性も、芳幾研究によって明らかになるものと思われる。上に挙げた『平仮名絵入新聞』の挿絵や、雑誌『歌舞伎新報』に描き続けた役者絵作品については、特に興味深いのが、これらについては稿を改めて論じることとする。

註

- 1) 錦絵新聞（新聞錦絵）については、主にメディア史の立場からの研究が進められてきている。端緒としては、小野秀雄『新聞錦絵』（毎日新聞社、1972年）があり、また土屋礼子『大阪の錦絵新聞』（三元社、1995）や同氏監修によるCD-ROMなど、同氏の研究は、この分野における最も充実した研究成果と言えよう。また近年、これをテーマにした展覧会も多く開催されるようになった。

「幕末・明治のメディア展」早稲田大学図書館、1987年

「新聞錦絵——文明開化の事件簿展」板橋区立美術館、1989年

「ニュースの誕生 かかわら版と新聞錦絵の情報世界」東京大学総合博物館、1999年

「明治のメディア師たち——錦絵新聞の世界」ニュースパーク（日本新聞博物館）、2001年

- 2) 落合芳幾の研究史については、拙稿「浮世絵師・落合芳幾に関する基礎的研究」（『GENESIS（京都造形芸術大学紀要）』20号、2016年）でまとめている。また豊原国周の研究史については拙稿「豊原国周研究序説」（『GENESIS』18号、2014年）で、さらに月岡芳年の研究史とその特徴についてもやはり拙稿「日本美術における「奇想」の受容——月岡芳年を中心に」（『美術史論集』16号、2016年、神戸大学美術史研究会）で記している。

- 3) 註2を参照。

- 4) 月岡芳年に関しては、以下の通り。

拙著『浮世絵版画の十九世紀 風景の時間、歴史の空間』ブリュッケ、2009年

拙著『謎解き浮世絵叢書 月岡芳年「和漢百物語」』二玄社、2011年

拙稿「月岡芳年画風変遷試考」『浮世絵芸術』115号、日本浮世絵協会、1995年

拙稿「月岡芳年歴史画考」『美術史』141冊、美術史学会、1996年

拙稿「『前賢故実』の波紋——月岡芳年を中心に」『没後一〇〇年 菊池容斎と明治の美術』展覧会カタログ、練馬区立美術館、1999年

拙稿「「血みどろ絵」考」『GENESIS』12号、京都造形芸術大学、2008年

拙稿「月岡芳年美人画考」『GENESIS』16号、京都造形芸術大学、2012年

拙稿「月岡芳年と明治の媒体」『没後120年 月岡芳年展』展覧会カタログ、太田記念美術館、2012年

拙稿「月岡芳年と「江戸」『浮世絵研究（太田記念美術館研究紀要）』3号、太田記念美術館、2012年

拙稿「西南戦争錦絵という媒体——月岡芳年作品を中心に」『GENESIS』17号、京都造形芸術大学、2013年

拙稿「日本美術における「奇想」の受容——月岡芳年を中心に」『美術史論集』16号、神戸大学美術

史研究会、2016年、註2を参照。

一方、豊原国周については、

拙稿「豊原国周研究序説」『GENESIS』18号、京都造形芸術大学、2014年、註2

拙稿「豊原国周研究——大首絵の構図を中心に」『GENESIS』19号、京都造形芸術大学、2015年

拙稿「豊原国周研究2——国周描く美人画作品について」『名古屋芸術大学研究紀要』第37巻、名古屋芸術大学、2016年

がある。また小林清親については、

拙著『名所の変貌——広重から清親へ』（展覧会図録、(財)中山道広重美術館、2003年）および当該図録掲載拙稿「名所」の変貌——小林清親「日本名勝図会」をめぐって」

拙稿「小林清親の光と広重受容」『GENESIS』11号、京都造形芸術大学、2007年

拙著『浮世絵版画の十九世紀』（前掲）

がある。

- 5) 引手茶屋は遊廓の客と店（見世）との間を取り持つ役割で、大規模店（大見世）に登楼する場合は必ず引手茶屋が見世まで案内することになっていたという。
永井義男「引手茶屋」（永井義男『図説 吉原事典』朝日新聞出版（朝日文庫）、2015年）
但し芳幾の生家については、引手茶屋ではなく編笠茶屋であるとの記述が霽軒生「落合芳幾《明治の錦絵》」（『日本及日本人』701号、1917年）に見られる。
- 6) 霽軒生「落合芳幾《明治の錦絵》」（註5）
- 7) しかし後年の文献である樋口二葉「落合芳幾」（『新小説』大正15年8月号/浮世絵趣味号、1925年）は、竹内久一の紹介によるとする説があることを紹介する。
- 8) たとえば本文中で挙げている同門の月岡芳年は、嘉永3年に数え齢11歳で国芳に入門している。拙稿「月岡芳年の伝記に関する諸問題」『学習院大学人文科学論集』3号、学習院大学大学院人文科学研究科、1994年
- 9) 井上和雄『浮世絵師傳』渡邊版画店、1933年
- 10) 岡本祐美「落合芳幾——その人と画業」『北海道教育大学紀要』（人文科学・社会科学編）第53巻第2号、2003年
- 11) 註6を参照。
- 12) 東京大学地震研究所および総合図書館サイト
<http://gazo.dlitc.u-tokyo.ac.jp/ishimoto/>（2016年5月参照）
- 13) 野崎左文『仮名反故』非売品、1895年（同氏『増補 私の見た明治文壇』2、平凡社東洋文庫、2007年に所収）
- 14) 「十目視所／十指々所 花王競十種咲分（はなくらべといろのさきわけ） 第初輯」安政6年か（芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第八巻所収）
「西洋学」や「巷街」（遊女）、「狂歌」など様々な分野の十人を選んだ番付。「当世十大家」の項には三代歌川豊国が、「筆頭十才子」には歌川国芳が、「若手十芸」には歌川国貞が挙げられているが、芳幾の名は「浮世画十個」の項に「真写 一恵齋芳幾」として掲載されている。
- 15) 「随一歌川 豊国芳年」『此花』第一枝、1910年
- 16) ちなみに国芳の葬儀の際、芳幾が弟弟子芳年を足蹴にしたとの逸話が遺されている。山中古洞「芳年伝備考」第二稿、1930年
- 17) 但し芳幾の肖像のみ梅素亭玄魚（ばいそてい・げんぎょ：1817～80）が担当している。玄魚は幕末期におけるグラフィックデザイナーであり、歌川広重の代表的なシリーズ「名所江戸百景」の目録を手

掛けた事でも知られる。

井上和雄『浮世絵師傳』（渡邊版画店、1931年）の「玄魚」の項には「摺物の図案及び草双紙の袋絵などに独特の意匠を凝らし書画共に能くしたりき」と記される（文中の真字は適宜新字体に直した）。

- 18) 荘逸楼主人「落合芳幾」『浮世絵』9号、1916年
霽軒生「落合芳幾《明治の錦絵》」『日本及日本人』701号、1917年
なお彼らが興じたものは「三題噺」や「興画合」だけではなく、仲間内の不行跡などをあげつらって風刺した「悪摺（あくずり）」と呼ばれた版画もあった。
「浮世絵類纂（其六）悪摺絵考」『此花』第9号、1913年
- 19) 岡戸敏幸「一〇 久万那幾影」作品解説（サントリー美術館編『「影絵」の十九世紀』展覧会図録、1995年9月）
- 20) 荘逸楼主人「落合芳幾」（『浮世絵』9号、1916年）はこの書物が「頗る世人の注意を引いた」と、評判が高かったことを記す。
- 21) 但し現時点で該当する番付書物を確認できていない。
- 22) 註6を参照。
- 23) 芳幾の影絵作品については、古くから取り上げられている。最も早い時期の文献では荘逸楼主人「落合芳幾」（註20）があり、続いて霽軒生「落合芳幾《明治の錦絵》」（註6）、また樋口二葉「落合芳幾」（『新小説』大正15年8月号（浮世絵趣味号）、1925年）でも代表作の一つとして挙げられる。しかし特に近年、サントリー美術館で開催された「「影絵」の十九世紀」展（1995年9月、註19）および、この展覧会を担当した岡戸敏幸氏による諸論考によってよく知られるところとなった。岡戸氏による主な先行研究は以下の通り。
岡戸敏幸「「影」と肖像」『日本の美学』21、ベリかん社、1994年
同氏「「影絵」の十九世紀——人は「影」に何を見てきたか」サントリー美術館編『「影絵」の十九世紀』展覧会図録（註19）
同氏「「影」と『肖像』の文化史」『月刊百科』390、平凡社、1995年
同氏「「影法師」の役者絵」『月刊百科』393、平凡社、1995年
同氏「「影法師」と追善」『月刊百科』395、平凡社、1995年
- 24) 菊地貞夫「第二回パリ万国博出品浮世絵関係資料」1～3、『MUSEUM（東京国立博物館研究誌）』89～91、1958年
- 25) 新藤茂「図版解説 落合芳幾画「俳優写真鏡」」『浮世絵芸術』114号、1995年
- 26) 新藤作品解説（註25）
- 27) 淡島寒月「私の幼かりしころ」『錦絵』2号、1917年
後に同氏『梵雲庵雑話』に採録。底本は岩波書店（岩波文庫）、1999年
- 28) 草創期の新聞とそれを担った人物たちの交友関係については、『明治のメディア師たち 錦絵新聞の世界』（註1）が詳しい。
- 29) 「錦絵新聞（新聞錦絵）」については註1を参照。
- 30) 荘逸楼主人「落合芳幾」（註20）は「それより功績の大なるは明治八年同志と共に東京絵入新聞を興して、新聞に挿絵を創始した一事は大に特筆すべき事である」と評価する。
- 31) 初出は荘逸楼主人「落合芳幾」（註20）。「此人の似顔絵は、国周の筆より最一層突込んで写生した傾きがある」と記される。また近年における最も充実した芳幾研究である岡本祐美「落合芳幾——その人と画業」（註10）は、芳幾の重要かつ評価すべき仕事として、『歌舞伎新報』に描いた役者絵作品群を挙げておられる。

- 32) 岡本前掲論文(註10)
- 33) 「一蕙齋芳幾の末路」『此花』第十七枝、1917年
- 34) 註33参照。追善書画会のご案内状は恵俊彦氏所蔵で、太田記念美術館編『歌川国芳とその一門展』図録(太田記念美術館、1990年)に掲載されている。またこの辺りの事情については、拙稿「浮世絵師・落合芳幾に関する基礎的研究」(註2)にまとめている。
- 35) 西田堇坡「三十三年前日報社創立談」『東京日日新聞』明治37年(1904)11月10号
- 36) 表記は旧暦。太陽暦にすると1872年3月29日になる。なお実際に発売されたのは、翌明治5年2月22日のことであったという。当初の同新聞は配達日から考えると一日遅れの日付が付されており、同日になったのは明治7年正月からだとされる。『毎日新聞百年史』毎日新聞社、昭和47年(1972)
- 37) 前掲西田記事(註35)によれば、創刊にあたって上海わたりの活字を手に入れて準備をしたとある。この辺りの事情について『毎日新聞百年史』(註36)は「あるいは祝儀的な意味をこめて、とくに木版りにしたのもでもあったろうか。芸術的な意味では、当時の技術としては木版に軍配があがるからである」と記している。
- 38) 毎日新聞社紙面データベース「毎索」および『東日七十年史』(東京日日新聞社、大阪毎日新聞社、昭和16年/1941)による。
- 39) 『毎日新聞百年史』(註36)但し、本稿筆者はモノクロ図版しか確認できていない。
- 40) 『毎日新聞百年史』(註36)
- 41) 『毎日新聞百年史』(註36)
- 42) 富澤達三「時事錦絵としての「錦絵新聞」——錦絵版『東京日日新聞』『郵便報知新聞』をめぐって」千葉市美術館編『文明開化の錦絵新聞——東京日々新聞・郵便報知新聞全作品』国書刊行会、2008年 富澤氏は、錦絵新聞の流れや全貌を紹介し、かつ錦絵新聞について出版時期と新聞発売時との問題や出版の様相などについても検討を加えておられる。本論文を含めた富澤氏の研究は、錦絵新聞を含めた「時事錦絵」(富澤氏による)に関して、最も貴重な研究となっている。
- 43) 富澤前掲論文(註42)
- 44) 富澤前掲論文(註42)
- 45) 署名「静齋芳邨」作品が明治9年11月に1点、「早川松山」署名作品が翌12月に3点存在することを、富澤達三氏が指摘している(富澤前掲論文・註42)。
なお「芳邨」は芳幾の同門の、「松山」は河鍋暁齋門下の浮世絵師である。
- 46) 東京日日新聞の社史『東日七十年史』(註38)にも、併合された後の毎日新聞社史『毎日新聞百年史』(註36)にも記されていない。
- 47) 岩切信一郎「錦絵新聞——浮世絵がニューメディアになった!？」(メディアとしての近代版画史 第1回)『版画芸術』146号、2009年
- 48) たとえば岩切前掲論文(註47)においても指摘されている。
- 49) 拙稿「月岡芳年と明治の媒体」『没後120年 月岡芳年展』図録、太田記念美術館、2012年
- 50) 富澤前掲論文(註42)は、錦絵版「郵便報知新聞」の取り上げる題材が、「東京日々新聞」に比較して殺人など陰惨な事件が少ないことを指摘している。
- 51) 原山詠子「新聞錦絵の絵画的表現」(『美学論究』第二十七編、関西学院大学、2012年)は、「東京日日新聞」錦絵が画面を分けないことで迫力ある画面を構成していると積極的に評価する。しかし一方、「郵便報知新聞」錦絵はその画面形式ゆえに、背景を墨つぶしにすることや、緻密な描き込みが可能となる(前掲拙稿「月岡芳年と明治の媒体」註49)。
- 52) 柳亭種彦作、歌川国貞(三代歌川豊国)挿絵による長編合巻。未完。文政12年(1829)から天保13

年（1842）まで、足掛け14年に渡って刊行されたが、作者の死去により未完となった。

掲載図版目録

- 図1 『粹興奇人傳』（文久元年）より「一蕙斎芳幾」国立国会図書館
- 図2 無款（落合芳幾か）「安政二稔十月二日夜亥朱刻大地震焼失市中騒動図」大判錦絵三枚続（無認可）、安政2年10月、東京大学地震研究所
- 図3 落合芳幾「（歌川国芳死絵）」文久元年、山口県立萩美術館・浦上記念館
- 図4 『粹興奇人傳』（文久元年）、国立国会図書館
- 図5 落合芳幾『久万那幾影』（慶應三年）より「芳幾」『影絵の十九世紀』展図録より転載
- 図6 『歳盛記』（慶応元年）、国立国会図書館
- 図7 『歳盛記』（明治元年）、国立国会図書館
- 図8 落合芳幾「俳優写真鏡 中村芝翫」明治3年、山口県立萩美術館・浦上記念館
- 図9 『東京日日新聞』第一号（明治5年2月21日号）、『毎策』（毎日新聞社紙面データベース）より
- 図10 落合芳幾「東京日々新聞 第一号」明治7年10月、千葉市美術館（『文明開化の錦絵新聞』より転載）
- 図11 落合芳幾「東京日々新聞大錦（開版予告）」未詳（明治7年8月以前）、千葉市美術館（『文明開化の錦絵新聞』より転載）
- 図12 月岡芳年「郵便報知新聞 第四百四十九号」明治8年、千葉市美術館（『文明開化の錦絵新聞』より転載）
- 図13 歌川国貞『修紫田舎源氏』第十一編挿絵、天保5年（1834）、国立国会図書館蔵（同館デジタル化資料より転載）